

マルホ大学院等海外派遣



アメリカ・ハリウッド

2017年10月6日～2017年10月12日



芳賀 優弥

[毒性学分野 博士前期過程2年(当時)]

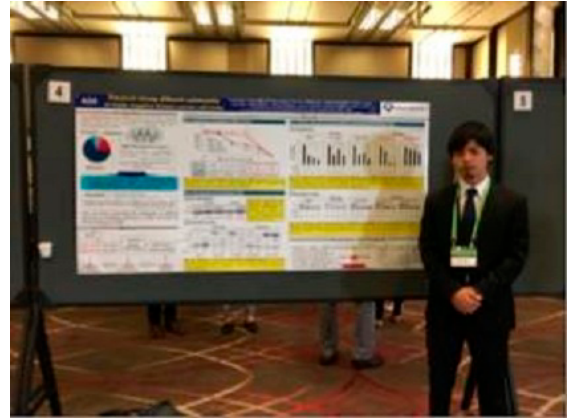
■目的

AACRが主催する乳癌に焦点を絞った学会に参加させていただくことで、発表・意見交換することで、今後の研究の進め方についてご助言・ご指摘を賜る。また、自らの研究を発表するだけでなく、著名な研究者の講演から乳癌研究における最新の知見を得ることが目的である。

■発表論文あるいは共同研究の題目と概要

【題目】 Dasatinib shows different cytotoxicity in triple negative breast cancer cell lines

【概要】 乳がんのサブタイプのひとつであるTriple Negative Breast Cancer (TNBC) 症例は、抗がん剤が主たる治療法となっているものの、副作用が強いこと、そのうえ、概して予後が悪く、早期に再発しやすいことが知られている。さらに昨今では、副作用の少ない分子標的医薬の適応拡大が試みられているものの、高い奏効率は得られていない。このような背景のもと、TNBC患者の中でも、薬剤に対する治療反応性や、遺伝子プロファイルが異なることが指摘されており、TNBC患者全てを同一に扱うことを疑問視する声も多い。従って、TNBCの薬物の治療反応性に基づく細分類化が、TNBCの複雑な分子病態の理解を通じた、TNBCに対する新規治療法の開発に貢献し得るものと考えられる。そこで本検討では、過去にTNBC全体を対象とした臨床試験が¹ 組まれたものの、適応に至らなかった慢性骨髄性白血病に対する分子標的医薬であるタ² サチニブ³ に関して、TNBCの分子病態解明の一環として、複数種のTNBC細胞株に対する治療反応性の違いと、標的分子であるSrcの発現を解析した。すると、TNBCサブタイプ間でダサチニブに対する細胞障害性に差が認められ、分子病態の違いが薬効に関与していることが示唆された。標的分子であるSrcを始めとする、癌関連分子、受容体の発現を解析した。すると、細胞ごとにSrcの発現状況が異なることが明らかとなり、細胞障害性のプロファイルと照らし合わせると、TNBCの中でも、標的分子であるSrcの発現が認められるにも関わらず、ダサチニブに抵抗性を示す細胞株が存在することが示唆された。そこで現在、Srcの下流分子であるAktの活性化等を指標に、ダサチニブに抵抗性を示した原因について追究している。



■海外派遣で得られた成果

今回、AACRの主催する乳癌に焦点を絞った学会に参加し、ポスター発表においては、多くの研究者に足を止めて頂き、これからの研究に繋がる意見を多数頂いた。自らの研究に関して、貴重な意見を頂けただけでなく、各国の著名な研究者の講演から、現在の研究の潮流を学ぶことができた。研究手法や注目を集める分子や薬剤など、現在の乳癌研究において、最新の知見を得ることができ、大変有意義であった。さらに、レセプションやポスター発表を通じて、英語による議論を重ね、自信をつけることができたと同時に、自らの英語力向上の必要性を再認識させられる機会が多くあった。しかし、多くの研究者と連絡先を交換させて頂き、日本だけでなく、世界の研究者との繋がりも今回の海外派遣で得られた成果である。これらの貴重な経験を、今後の研究に最大限生かしていけるよう、精進していきたい。